

島台考 (1)

——島台と婚礼

1 島台をさがす

島台とは何かといえ、**「島台考——序説」**（『日文研叢書36』二〇〇五年九月）で述べたように、その形から説いたりその機能（役割）から説いたりすることで、いくつかの説明が可能であった。けれども島台を最も簡潔に、要領よく説明するとすれば「婚礼・饗応などに用いる飾り物」ということになろう。

島台はいまでは一般の目に触れることがきわめて少なくなったものだが、かつてはめでたい席にきまつて置かれるものであり、とくに婚礼の席にはよく用いられたようである。というのも婚礼の場面を描いた絵画などに島台はほとんど付き物と言っていいくらい頻繁に登場するからである。

結婚は一人の人間の人生における最大の節目であり、多くの人と

白幡洋三郎

の関係を確認し、また新たに多くの人との関係をつくりだす大きなイベントである。そこで当然ながら結婚をめぐるさまざまな行事が行われ、その中でも婚礼の儀式はもつとも盛大なものとなったのである。しかしひとくちに「婚礼」といっても、その儀礼の中には事前の「結納」があつたり、婚礼当日の「色直し」があつたり、事後の「挨拶回り」などさまざまな行事があつて、それらの総体が婚礼をつくりあげていると考えられる。そうしたさまざまな儀礼の、どの場面に島台が現れるのであろうか。一つ一つ確認する作業が必要となる。

美術全集、画集、図集などを見てきた経験から言えば、島台が登場するのは江戸時代の絵画に多い。しかしいくらか描かれた数が多いといっても、それだけで島台の出演が多かった、島台がよく使われたという証拠にはならない。とくに江戸時代以前の絵画（画像史

料)は少なく、おおむね元禄時代頃から絵図類が増える傾向があるから、江戸時代中期以降の絵画に島台が登場する頻度が多いのは当然だとの議論も成り立つ。絵図類の絶対数が増加するのに伴って、島台に限らず絵に記録されるものが増え、その中で江戸時代のそれも中期あたりから島台が描かれる数が多くなったとも見られるのである。

そうした背景はともかく、描かれた島台を一つ一つ見て行こう。

それも婚礼の場面に現れる島台にできるだけ絞って見て行こうと思う。前述したとおり島台は婚礼の儀式と特に深く結びついているように思われるからである。描かれた島台をできるだけ時代順に見て行くことによつて、その形態や意匠がどんな風に変化するのかわかってくるのであつた。個々の島台それぞれの特徴とともに島台が果たしていた役割、機能が見えて来るに違いない。

2 礼法書に現れる島台

最初に取り上げるのは『小笠原流えいり・男女諸礼宝鑑』小笠原長貞作 元禄十一年(一六九八)に現れる島台である(図1)。この島台は洲浜台の上に老松を立て、竹をあしらつて鶴と亀を飾つたものである。鶴がどこにいいのかわかりにくい、亀の奥、竹と松にかくれて頭だけ右手に突き出ているのが鶴である。そして松や竹、鶴亀の飾り物の隙間に酒の肴であろうと思われ、載せられ

ている(「長柄挑子くはへたるべし」「右祝儀膳の上にて島台酒一篇廻りて一番に此島台をいだと心得べし」)。

この図の様子(肴が載っている)や「長柄挑(銚)子」を添えることなどの記述から、この島台は儀礼の中心をなす重要な飾りであるとともに、また酒杯をめぐらすための装置としても用意されていることがわかる(島台「一対置べし此外は面々の身分に応ずべし。先ず略を写す」)。

ここに描かれている島台は、たんなる装飾品でもなければ座を莊厳する装置でもなく、かなり「実用」も含んだ機能を持たされている。つまり装飾・莊嚴・飾りであると同時に食物を載せる膳の役割も果たしているようだ。ところがさらにもう一つ「島台」と書かれた絵が載せられている(図2)。これは洲浜台に竹(主として太い桿の部分と葉)を飾り、若松と竹の子を配した島台である。松と竹だけで構成されている、変わった島台だといふべきだろう。さらにもう一つ小さく洲浜台の図が載せられていて、雉と思われる鳥が描かれているので不思議な感じがする。図を見て判断できる範囲では、竹にスキあるいはカヤが飾られ雉が載っている。「羽もりおさへの台」と書かれているが、「羽もり」とは狩りで得た野鳥を載せたものようである。珍しい贅沢な食材としての野鳥は山・里の幸としてめでたい席を飾るのにふさわしいものであつたからである。

これらの図は本書『小笠原流えいり・男女諸礼宝鑑』の「三之



図2 島台『小笠原えいり男女諸礼宝鑑』(三之卷)



図1 島台『小笠原えいり男女諸礼宝鑑』(三之卷)

「巻」の冒頭に載せられている。本書は全部で六巻六冊の構成であるが、三之巻は婚礼・祝言の飾りや床の間飾り、茶の湯道具の配置、正月座敷飾り、などについての記述と図示がその内容である。ところが一つ前の「二之巻」も婚礼・祝言の飾り物について記述と図示があり、そこに島台ではないかと思われる図がいくつも掲載されている。

まず「宝台一」と書かれた図3は、島台といってよいだろう(図3)。描かれている図と記載を見てゆくと、台はまさしく洲浜形の洲浜台で、その上に鶴、亀、松、竹、若松、竹の子が飾られていることが確かに確認でき、これは島台といってよいと思う。ところが図には「宝台」と書かれ、「ほうだい」とルビがついている。また、図の下にはこの台に載せるものであろう香の名前が記されている。「からすみ、かすのこ、まきするめ、きりのし、こんふ、むめぼし、大祢」これら七品の香を盛り合わせるのを「七種の香」というと書いてある(「右七いろをもりあはせにして、金銀の露を敷くべし。七種の香と云」)。

「右同二」(図4)と書かれた図はすなわち「宝台二」ということになるが、老松の下に置かれている作り物は「尉」と「姥」のようである。松、尉、姥の飾り物となれば島台というほかない置物である。図の下部に文字で記載されているのは酒の香の名前である。「海老のみ、まきするめ、かまほこ、こむめ、わかめ」とあって、



図3 宝台『小笠原えいり男女諸礼宝鑑』(二之巻)



図4 宝台『小笠原えいり男女諸礼宝鑑』(二之巻)

これら五種の肴を台に盛り合わせる。またこの台を「あひをひの松にじやうとうばの作物高砂の台ともいふ也」と記しているから、本書はこの飾り台を鳥台の一種である「高砂台」としている。

さらに「右同三」(図5)は「宝台三」ということになるが、これは若松に竹を配した台に「とこぶし、たにし、まきするめ」を盛り合わせたもので、「三種の肴」と称する。

以上、宝台と称する台は、「七種の肴」「五種の肴」「三種の肴」を盛り合わせ、七・五・三のめでたい数字にして祝儀の座に供するための台である。お銚子が回されたのち、三つともに祝儀座に出される。他に座中を回される台もあるが、この三つは「祝儀主」のためだけの三献(「三べんの御肴」として置かれるもので、座中を持ち回ったりされることはない、と書かれている。

座中を持ち回る台は「歩台」と称し、三種が描かれている。その三種とは①「松竹梅の歩台」(図6)②「重羽の台」(図7)③「諸鯉の台」(図8)である。

①(図6)「松竹梅の歩台」は洲浜台の上に松・竹・梅を飾り、九種の肴を盛り合わせて台に載せたものである。九種の肴は「するめ、わかめ、小うめ、こんぶ、むすびのし、からすみ、かまぼこ、海老、かいのみ」。

②(図7)は図を見ると二羽の鳥(山鳥であろうか)が並べて台の上に置かれていると見える。右下に書かれた文字は刷りがつぶれて

いて判読しづらいが「鳥の焼ミ、たはねのり、きさみこぶ」の三種の肴であろう。夫婦に見立てたつがい鳥を重ねておくことで「重羽」の台というのであろうか。そして台の上に三種の肴を載せるようである。「大かたはおさへに出る御肴台也」とあるから盃が回る最後に出されるものらしい。

③(図8)は魚が二尾並べられた台である。鯉を二尾並べ、他に三種の肴(「からすみ、かずのこ、こんぶ」)を盛り合わせて台にのせるものようである。これを称して「諸鯉(もろこい)」というものは、たがいに恋し合う、相思相愛の「諸恋(もろこい)」に掛けた、掛詞として用いているのだろうか。

以上、文字の記載と図とを見てみると、「島台」と記載されている飾り台が二種類、島台と書かれてはいないが島台とも見られる「宝台」なるものが三種類、さらに「歩台」と称する台が三種類あって、いずれも洲浜台の形を持っている。洲浜台の上にさまざまな違いを持つ飾りがなされるわけで、これらすべてを広い意味で「島台」と総称できるのかどうか不明である。とくに、それぞれの役割・機能が必ずしも明確ではなく、配置の場所が不明である。

島台を論じようとして初期の文献から入ったのであるが、多数の事例が出てきて混乱してしまった。江戸時代のうちでもまだ初期の方に属す元禄期には「島台」なるものがまだ厳密な形と機能を付与

されていなかったのであろうか。それとも本書が男女の諸儀礼を包括的に説こうとして、多くの事例を取り込むあまり、整頓ができなくなつて混乱したのであろうか。これらの件について、以下で徐々に解明して行きたいと思う。

本書が成立した由来は序文によれば、小笠原長貞がその息女の婚礼の際に記した礼法や教養についての一書であるという。元は女性のための書で『諸礼宝鑑』と称したが「女中のしつけかたはかりにもかぎらず、男がたにも皆用る事」であるため、男女共通の教養書として、図を多く加えて刊行したものだという(小泉吉永氏による「解題」)。

本書の内容全体からみると、一之巻の婚礼道具についての記述やその図解は、小笠原長貞の息女の婚礼の実際を略述したものと考えられている。また二之巻、三之巻に掲載されている島台他各種の台についても戦国期の小笠原長貞の時代に用いられたものの記述と受け取つて良いかもしれないが、記述の内容を正確に読みとることが容易ではない。率直に言つて記述はわかりにくい。各種の台の機能、配置や役割等が明快でないのは当初の書物がそうであったのか、江戸時代に入つて再編集された本書において明快でなくなつたのか判定できない。じつさい、小笠原長貞の当初の記録に図があつたかかなかつたか確認できず、本書出版時に実際目にするのができた江戸時代の各種の台が図示されているのではないかと考えられるとこ

ろである。

3 明治期の礼法書からみた島台

そこで時代をぐっと下らせて、婚礼を扱った明治の出版物の中の島台を見てみたい。明治の世になってから徳川の時代全体を振り返ってみることが可能になったのであり、武家の時代全体を広く見渡した視点から島台を検討できるのではないか。

ここで取り上げるのは、明治二九年に刊行された『類聚婚礼式』である。本書には島台と思われる図もいくつか掲載されており、解説も付されている。編集意図の一つは、日本古来の習俗・習慣を現在ならびに後世へ正しく伝えることだという。本来朝廷儀礼から民間の年中行事に至るまで、諸外国と異なる儀礼が多かった我が国にも、外国の習慣が混入しはじめ、紛らわしいものが出はじめた、いまこそ正しい習わしを書き記しておきたい、との思いから出版されたといった趣旨が書かれている。タテマエの趣旨であることは言うまでもないが、しかし過去とくに旧幕時代の婚礼式から「伝統」の正しい形を取り出し、それを伝えたいとの思いがある。

本書は全部で六巻に分かれるが、巻一「結納之部」、巻二「里出之部」、巻三「嫁迎之部」となっており、前半の三巻で婚礼式の主眼部分語られる。以下の巻は、巻四「三ツ目以下之部」(婚礼式を支える従者たちへの対応)、巻五「雑事之部上」、巻六「雑事之部

下」で、補足的な内容である。そして島台が関係するのは、とくに巻三で扱われる「嫁迎」の時である。さらに詳しく言えば、「嫁迎」は、(上)、(中)の二項に別れており(なぜか目次には(下)があるが、本文記載は欠落している)(上)は嫁迎えの事前準備と迎えるための床飾り、饗宴が始まるまでの儀礼を扱っている。(中)は嫁迎えの饗宴についての説明であり、ここに島台をはじめとする台の物が記載、図示されている。まず島台に似た「奈良蓬萊」なるものが図で現れる(図9)。

この台の上部、洲浜の形をした台の上には、図中の表示を見ると「松、竹、玉椿、杜葉、泉ノ壺、太々、橘、梅、裏白」などが飾られているようだが、別の項目で次のように説明されている。

奈良蓬萊 床の正中まなかに置也、下に長机を据すえ、上に大三方を安おき、其上に州浜形五色敷米をして置き、其上に大亀を鎮おき、亀の上に泉の壺を置く、壺の口赤地の錦にて覆ひ、紅打紐にて結ひ、壺の内には秘符を納いれ、岩の後に岩組極彩色貝揃を置き貝に糸花老松に金糸を掛け、鶴巢籠紅白梅桃長椿橘若竹、其外下草に数柑子福寿草の類を植る也。(『類聚婚礼式』六三頁)

長机の上に三宝を置き、その上の洲浜台に松、鶴、亀などのめでたい作り物や植物を飾った飾り台である。これがどのように配置さ

奈良蓬萊の圖

松、竹、玉椿
杜若、泉ノ鹽
太々、橘、梅
裏白、

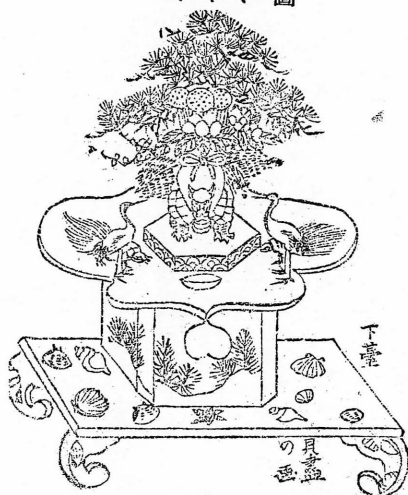


図9 奈良蓬萊の図【類聚婚礼式】

れるかは別の図に描かれている(図10)。

この図は「色直し」の場面を描いたと説明されているが、床の間の中央に、長机・三宝・洲浜台の順に積まれた奈良蓬萊台が見える。ところが手前にこれとよく似た台飾りが置かれている。後者がじつは「島台」とされているのであるが、島台については後に述べるとして、本書中に奈良蓬萊台について書かれた別の部分を引いてみる。

台のものは、所謂蓬萊の台とて、蓬萊山にかたとりたる物也、平常用る島台(島台は板を島に模りて造り養老高砂などにかたとり岩木花鳥などの作物を置物にて台を島形などと云う)と同し様なれとも、作物は三つの山に松竹梅鶴亀など也(同、八一

(圖の直色) 式姻婚名大諸前以治明



図10 明治以前諸大名婚姻式(色直しの図)【類聚婚礼式】

頁「嫁迎え上」の項

ここに蓬莱台と島台の意味の違い、象徴するものの違いが若干説明されている。けれどもその違いはこの説明を読んでも了解しにくい。蓬莱台と島台のはっきりした違いは、むしろ形にあらわれる。違いは台の足である。床の間の蓬莱台の「足」に当たる部分は三宝であるが、手前のは「華足」(他に「猫足」「狸々足」などと称する)と呼ばれる独特の曲線を持つ足がついている。華足であれば必ず島台というわけではないが、「蓬莱台は華足ではない」ことで区別はつきりする。

では島台はどのように説明されているか。次に引いてみよう。

木地洲浜形大サ二尺二寸程、真に糸花老松紅白梅長椿下草福
寿草山橘等へ、左の方へ尉、右の方へ姥、何れも面、木地衣装
金入の類なり、土器一ツ、大重金磨前に置、島台高砂に限らず
目出度作り物を用、西王母浦島子狸々等をも用るなり(同、一
三二頁「嫁迎え下」の項)

ここに書かれている内容を簡単に要約すれば、島台とは洲浜形の台にめでたい草木を飾り、尉と姥の人形を置くものである、ということであるが、尉と姥に限らずめでたい作り物、たとえば西王母や

浦島、狸々などを飾る場合もあるという。この文章で、もう一つ注意しておくべきは、土器を一つ台上に置くことに関して書かれているところで、この土器は祝いの酒を座中に回すために用意されるものである。ただし、島台について書かれたこの項は、享和二年一月に行われた毛利甲斐守の婚礼時の様子を記したものである(同一二八頁)。従って、この時の婚礼に用いられた島台の説明にはなっているはずだが、島台一般の説明になっているかどうかは分からない。

この項の後に付された図の中に島台を描いたものがあり、これを見ると松と梅が飾られ、松の樹上で巣作りしている鶴とその雛のほかに鶴がいる(図11)。先の記述にある尉と姥の置物は見られませんが、盃は一つ置かれている。この盃が島台に載せられて座を回ることになるであろう。ところが、不思議なことに「盃台」と書かれた別の図があり、その台上にも盃が載っているのである。それは洲浜台の上に松と竹が飾られ、盃が一つ置かれた台である(図12)。華足の洲浜台にめでたい松と竹が飾られているから、装飾の点からはこれを島台と呼んでもいいのではないかと思うが、島台ではなく盃台と書かれている。

ではこの二つの台、「島台」と「盃台」の違いは何であろうか。島台には説明があったが盃台の説明がないので、図で比較するほかない。そうすると双方共通するのは、華足の洲浜台であり、飾りの



図11 鳴台【類聚婚礼式】



図12 盃台【類聚婚礼式】

方は盃のためだけの台ではない。ほかの機能も担っていることが想像できる。そこで島台が受け持つ機能を確かめるため、次に各種の描かれた島台を見てゆくことにしよう。

4 描かれた島台

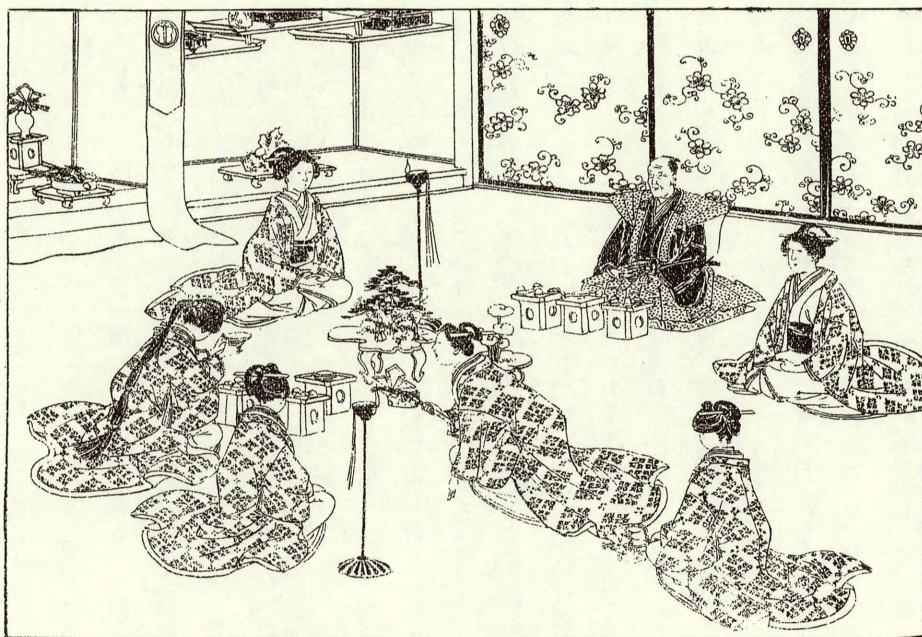
前節で取り上げた明治二九年刊行の『類聚婚礼式』には巻頭にまともな婚礼の様子を描いた絵が載せられているが、そのうちの一枚に「舅

植物であり、さらに一つの盃が載っている点である。双方の違いは、「島台」には鶴が置かれ、「盃台」にはそれがないということになる。島台を説明した先の文章では、尉と姥に限らず「目出度作り物」が用意されるのだから鶴は「めでたい作り物」の一つであり、島台を構成する要件を満たすのだろう。

このように「島台」と呼ぶ台と、「盃台」と呼ぶ台の二つが用意されており、装飾をなす台上の作り物の構成が異なるけれども、ともに座の間に盃を回すための装置、儀礼道具として用いられることは間違いなく考えられる。しかし、盃台は盃を座に回す装置であるからそう名付けられているであろうことは想像できるが、島台の

江初対面式の図」と題したものがある。興入れた嫁が舅に初めて対面する儀式であろう。図は嫁と舅が、それぞれ床の間に左右側方に見る位置で対面し、今まさに嫁が盃を押し載しているところである。床の間を背にしている女、銚子を手している女、嫁、舅にそれぞれ付き従う位置に座っている女たちは、介添え役となるこの家の年長の者（使用人）であろう。

対面する嫁と舅の中間（わずかばかり嫁の側に寄った位置）に島台が置かれている（図13）。この島台には松などの植物の飾りに、作り物の尉と姥が配されている。このような構成を持った島台が「高砂の島台」（高砂の松に尉と姥）と呼ばれるものである。嫁が両手で



(圖の式面對初江舅)上同

図13 明治以前諸大名婚姻式(男へ対面式の図)『類聚婚礼式』



図14 鈴木春信「杯」『婚礼錦貞女車』より(『秘蔵浮世絵大観』「ブルヴェラ
ー・コレクション」講談社 所収)

持っている盃は島台の上に載っていたものではないようだ。島台のすぐ前に置かれていた三宝の上に盃ふうのものが見えるが、この上に重ねられていた盃の一つを嫁が手にしていると思われる。嫁の前にあるものと同様の三宝台が舅の前に並んでいる三つのうちの真ん中のものであろう。盃による儀礼を行うためには三宝が用意され、三宝に載せて盃は運ばれるようである。一方、島台は、その場をめでたい場として確認するための道具、その場をめでたい場として飾るために用いられる装飾具と考えて良いだろう。

婚礼の場面を飾る島台はさまざまに描かれているが、その場での役割や意味などに深入りせず、とりあえず描かれた島台を見てゆくことよって、島台の意味を周辺から探ってみよう。

鈴木春信が描いた錦絵集「婚礼錦貞女車」の中に「杯」と題された絵があり、そこに島台が描かれている(図14)。婚礼の「杯ごと」が進行中の場面であり、舅と思われる男が盃を右手にもち酒を受けているところである。島台は画面右手前に置かれている。島台の上にある作り物は、植物は松、竹、動物は鶴が確かに見えるが、亀が置かれているかどうかはつきりしない。そのほかに岩、小石のように見えるものもある。それらは酒の肴かもしれないが絵からは判別困難である。島台の横には三宝が置かれており、舅が手にしている盃は、この三宝に載せられていたものであろう。嫁、婿は画面左手、屏風が立てられた奥の座敷にいて、その間盃は三宝に載せられ順次

座を巡って運ばれ、盃を手にした者に酒が注がれる。三宝は盃を載せる盃台として用いられるのであろう。島台も同じく盃・盃台に寄り添うように運ばれ、盃の酒を口にする者の側にあつて、その場を言祝ぐ役割を果たすのかもしれないが、この絵だけではそこまで読み取ることができない(『秘蔵浮世絵大観』「ブルヴェラー・コレクション」より)。

シーボルトの依頼で多くの日本風俗画を描いた川原慶賀の絵に、いくつか島台が描かれている。まず最初は、現在オランダ国立ライデン民族博物館が所蔵している婚礼の場面の絵である。図集の中では「長崎歳時記 人の一生」と題されており、一連の婚礼儀式の一場面である(図15)。床の間を背に、嫁が盃を手にしているところであるが、その右手に島台が置かれている。台上は松竹梅の飾りに鶴の置物が二羽、そのほかに何か置かれているが不明である。小石であろうか肴であろうか。背後の床の間に飾られているのは盆石の台である。

島台の位置が一座の人物群より床の間に近いところであり、その左右に婿と嫁が座っているのに注目したい。島台は儀式の空間を取り仕切るように一座全体のもつとも上位の位置を占めて置かれているようである。

もう一枚の絵も図集の中では「長崎歳時記 人の一生」と題された絵であり、先の絵と同じく嫁が盃を手にしている場面が描かれて



図15 川原慶賀「長崎歳時記、人の一生」(オランダ国立ライデン民族学博物館蔵) (『秘蔵浮世絵Ⅲ、シーボルトコレクション』講談社 所収)



図16 川原慶賀「長崎歳時記、人の一生」(オランダ国立ライデン民族学博物館蔵) (『秘蔵浮世絵Ⅲ、シーボルトコレクション』講談社 所収)



図17 嫁入（川原慶賀、人の一生画冊より）『江戸時代図誌』25「長崎・横浜」筑摩書房 所収

いる（図16）。しかしこの絵では嫁一人だけが床の間を背にした上座にいとってよい。そしてその横に並んで島台が置かれている。この島台に飾られているのは松と鶴。鶴は二羽で餌をついばんでいるような様子である。この島台もまた、この儀式の座を統括するようなもつとも上位の位置を占めているように思われる。この絵の床の間には台上に鳥の作り物が一羽とまっているが、この鳥は鶴鴿セキレイであろう。鶴鴿が飾られているので、この場面では嫁・婿の床入りの儀礼が行われていることがわかる。

もう一枚の川原慶賀による絵では、島台の位置が先の二枚の絵とは違っている（図17）。床の間の側ではなく、障子を背にした側面に置かれておりこれは一座を統括するような位置には見えない。嫁が盃を手にしているのは先の絵と同じであるが、嫁の位置が床の間から最も遠く、婿が床の間を背にした位置に座っている。

島台の飾りは先の二枚の絵よりも凝った造りになっていて、磯の老松と岩、鶴と亀の置物がありその周りには刺身ではないかと思えるものがたくさん並べられている。座の中心部に朱塗りの台に載せられた伊勢海老が見える。したがって島台の上に並んでいるのは刺身でなかったとしてもなんらかの酒の肴かと思われる。この場面では島台は肴を載せる台として使われている。

こうしてみると、島台はただ一カ所に置かれたままで、移動させられずに固定的な飾りとして用いられるのではなく、儀礼に応



図18 歌川国直、鼠の嫁入(版下絵)、『秘蔵浮世絵大観』5「ヴィクトリア・アルバート博物館」II 所収、講談社、1989

じて持ち運ばれ、それぞれの座敷・場面で異なる役割を演じているようだ。

5 島台の広がり

最後に人間世界ではなく想像の異界に描かれた島台、それもやはり婚礼の場面に現れるものを見てみよう。歌川国直「鼠の嫁入り」(図18)ではネズミの嫁が盃を手にしており、その横に婿が座っている。この宴席の背後には大きな松と竹を飾り、岩を配した島台が飾られている。岩の根元あたりの雰囲気は砂浜の感じである。州浜台の上をめだたい飾りを施したものが島台であるという島台の基本的な性格そのものを表現している。島台を描くことによって、ネズミの世界の嫁入りもよりリアルに感じられ具体的に想像できたので

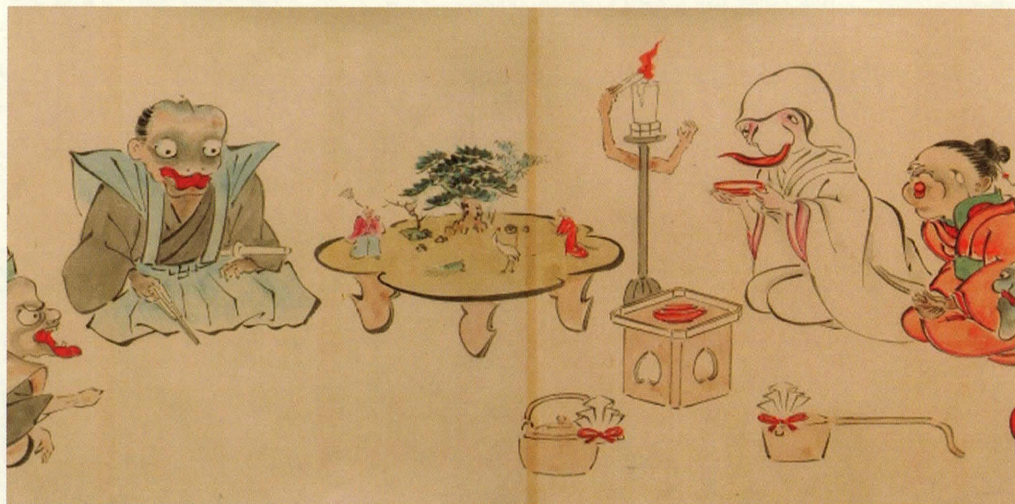


図19 化物婚礼絵巻(国際日本文化研究センター蔵)

あろう。

さらに不思議な世界に存在する島台がある。江戸後期に描かれたと見られる化け物を描いた絵巻に島台が登場するのである。この絵巻はいくつもの写本があるようだが、現在『化物婚礼絵巻』と題されており、どれにも婚礼の宴席の場面があつてそこに島台が登場する。ここで掲げるのはそのうちの一つである(図19)。化け物の嫁が赤く長い舌を見せ、盃の酒を舐めるように飲んでいるが、その嫁と化け物の婿との間に島台が置かれている。島台は松、鶴などのほかに尉と姥が飾られている。高砂の島台といつてよいだろう。ここでとくに興味深いのは、尉と姥が人間の老人であることだ。化け物世界の老化け物の姿ではなく人間の尉と姥が飾られている。

このように島台は婚礼につきものの道具、飾りと意識されていた。鼠の世界、化け物の世界を描写するにも、婚礼の場面となれば島台を描けばいかにも婚礼であることがはっきり認識されたのである。嫁が身につける婚礼衣装、髪飾りや帽子は特別なものであり、これらが描かれることによって婚礼の場面の雰囲気は伝わったと思われるが、嫁が登場しない場面であつてもその場に島台が描かれていることによつて婚礼であることが即座に了解できたのである。島台は近世江戸時代の婚礼には欠かせない作り物であつたことがしのばれる。

(本稿は「島台考——序説」『日文研叢書36』二〇〇五年九月所収、の
続稿である)

参考文献・参考図

- 『小笠原流えいり男女諸礼宝鑑』小笠原長貞 元禄十一(二六九八)年(江戸時代女性文庫45 大空社 一九九六年[影印版])
- 『類聚婚礼式』有任齋著 一八九六年 東陽堂
- 『婚礼錦貞女車』鈴木春信 プルヴェラー・コレクション『秘蔵浮世絵大観』榑崎宗重編著 講談社 一九九〇年
- 『長崎歳時記 人の一生』川原慶賀 オランダ国立ライデン民族学博物館シーボルト・コレクション『秘蔵浮世絵』III 陰里鐵郎編 講談社 一九七八年
- 『人の一生画冊』川原慶賀『江戸時代図誌』25「長崎・横浜」越中哲也、大戸吉古編 筑摩書房 一九七六年
- 『鼠の嫁入り』歌川国直「ヴィクトリア・アルバート博物館」II
- 『秘蔵浮世絵大観』5 榑崎宗重編著 講談社 一九八九年
- 『化物婚礼絵巻』国際日本文化研究センター蔵